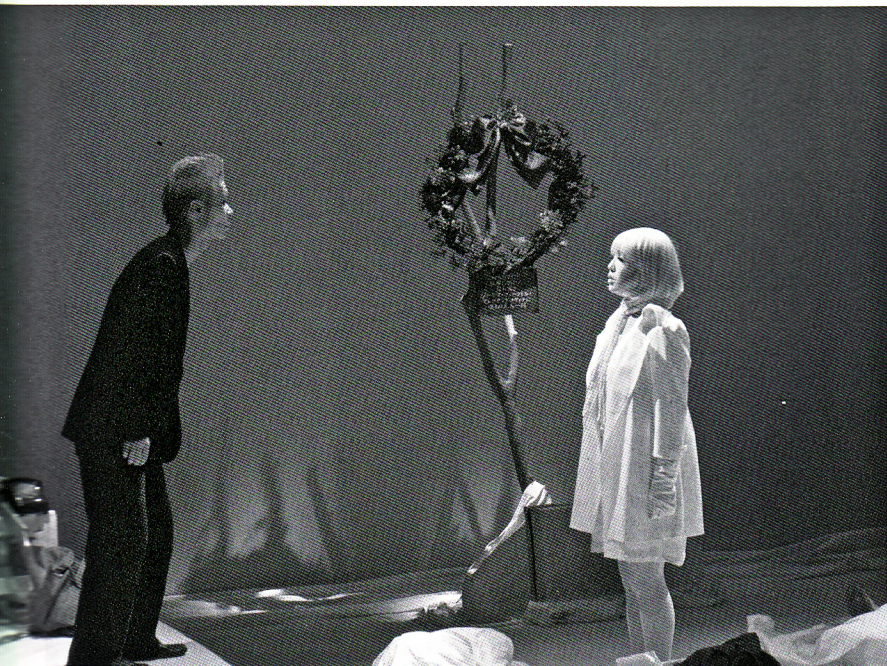


北陸演劇通信

演劇レポート 22

text by: 夢二



左から月原豊、澤田春菜。

劇団アンゲルス第15回本公演

「鴨猟」

絶望を抱いて砂漠に生きる男の姿、
モノトーンな舞台上で効果的に表現。

原作：A・ヴァンピーロフ 台本／演出：岡井直道

出演：月原豊、下條世津子、澤田春菜、Lavit（劇団ひまわり金沢）、川本千晴、東義久（劇団ひまわり金沢）、内多優（同）、遠藤倫十

12/2（木）、3（金）

@金沢市民芸術村PIT2ドラマ工房

金沢の姉妹都市であるロシア・イルクーツク市出身の作家、A・ヴァンピーロフの原作を舞台化したアンゲルスの公演「鴨猟」は、設定を砂漠に置き換えた岡井氏の演出手腕が光った。

ほとんど白一色の舞台上に砂漠の光景がスライドで投影される。冒頭から目覚めの酒をあおる主人公・ジローフに葬式の花輪が届けられ、何やら禍々しい雰囲気漂う。やがて顔や髪を白く塗った白装束の人々が登場。彼らはぜんまい仕掛けの機械のように動き、一本調子にセリフを喋り終わると、その場で空気が抜けたビニール人形のように崩れ落ちる。次の場面には、また立ち上がる。それは絶望したジローフにとって全く興味が持てないモノトーンな外部世界であり、過去の亡霊あるいは心象風景にも見える。かつて愛した妻も今では白い人の一員だ。彼が「神聖」な恋人として救いを求める18歳の学生・イリーナも、等身大の人形に過ぎない。個々の演出手法は以前の公演で使ったこともあり、決して目新しくはないが、それらを組み合わせて彼の違和感を巧みに表現した。全体の基調を成した葬送進行曲をはじめ、妻への回想シーンで流れるサティのジムノペディ、ラストを締めくくるタンゴなどの音楽も非常に効果を上げていた。

ゲネプロでは、ジローフが猟銃の筒先を口にくわえ、靴を脱ぎ、足で引き金を引こうとする場面があった。結局、彼は死に切れず、電話のベルが鳴る。友人から誘いを受けて鴨猟に出かけようとするのだが、木のベンチに躓いて転び、暴発した銃弾に胸を打ち抜かれて死ぬ。しかし、本番初日には電話が鳴るまでの自殺未遂シーンは丸ごと削除された。岡井氏としては重苦しさを避けたかったとも思われるが、少し残念だった。彼の死を単なる慌て者の突発的な事故で終わらせたくはなかったから。もっとも、そういう無意味な偶然性こそ、バカバカしさ故にこの世で一番悲しいものかもしれないが。